我が国への治療体操の伝播に関する研究

中　川　一　彦

The introduction of remedial gymnastics to Japan

Kazuhiko Nakagawa

抄　録

文献を介し、我が国への治療体操の伝播について調べ、以下のことを知ることが出来た。

①我が国へ伝播した治療体操の源は、スエーデンのリングの体操と考えられた。

②このリングの体操は、ドイツを経て、1872年、『榭中體操法圖』として紹介され、二つ、アメリカを経て、1878年體操傳習所へ伝えられ、三つ、これもアメリカから、川瀬元九郎によって、1900年代当初、療病的体操として紹介された。そして四つ、ドイツで学んだ田代義徳によって、治療体操として紹介された。

③前者二つの流れは、後に、現今の体育に収斂し、川瀬元九郎と田代義徳に端を発する流れは、現今、我が国の理学療法でいうところの治療体操そのものの源流と見ることが出来た。

キーワード：治療体操
理学療法
スエーデン体操
川瀬元九郎
田代義徳

１．はじめに

明治時代、我が国への体操の伝来について、北沢は、ひとつは、陸軍の関係者がフランスに指導者を求めた流れ、そしてもうひとつの流れとして文部省（現・文部科学省）が、體操傳習所開設に当たりアメリカに求めた流れがあることを明らかにしている[10)]。

そして、中川は体操が医療的な考え方を背景に持ち、ドイツやアメリカから伝播したことを紹介している[16)]。

そこで、本研究では、理学療法と関係の深い治療体操について、その伝播の経緯を整理してみたので、ここに報告する。

２．我が国最初の体操教科書

体操に関わる我が国最初の文部省指定教科書（1873年）は、大学南校（現・東京大学）で『榭中體操法圖』として1872年翻訳出版された、シュレーバー（D. G. M. Shreber、1808～1861）の『Arzliche Zimmer Gymnastik』（1855）の付図（図１）である。

シュレーバーは、ライプチヒ大学の医学部を卒業し、ドイツ式医療体操を考案し、1852年には『Kinesatrik』（運動医療法）をも著している[2)]。

このシュレーバーに影響を与えたと考えられる人物に、彼の友人だったリヒター（H. E. Richter，1808～1876）がおり、リヒターは、また、1845年に『Die Schewedishe Rationale und Medizinische Gymnastik』（スエーデン式合理的医学的体操）を著してい

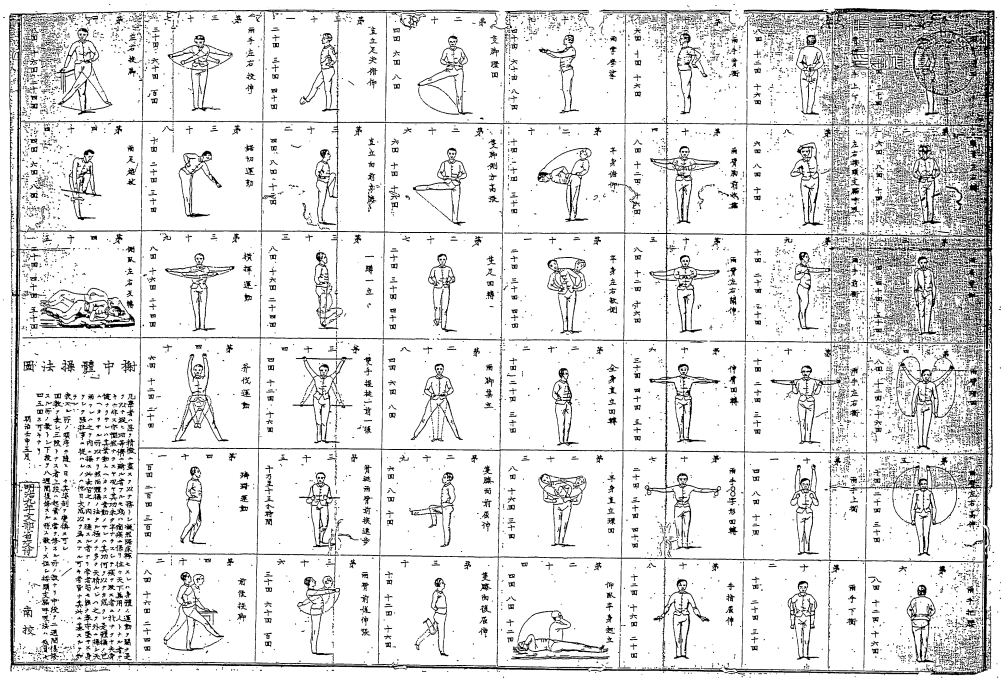

図１　榭中體操法圖（国立国会図書館蔵）

た[2)]。

そして、この様なドイツにおける医療体操の発展に寄与した人物として、1844年、スエーデンからドイツへ渡ったロートシュタイン（H. Rothstein，1810～1865）というリング（P. H. Ling，1766～1839）の弟子がおり、彼は、ドイツで、体操の持つ医療的効果を伝え、体操と医学とのかかわりを広く知らしめていたのである[19)]。

この様に、我が国では最初の体操の教科書となった『榭中體操法圖』ではあったが、それは、リングの医療体操を根元とするものであったのである。

3．リングの医療体操について

リングは、1799年、ナハテガル（F. Nachtegall，1777～1847）が、デンマークに創った体操学校（Gymnastic Institute in Copenhagen）へ留学（1799～1804）し、体操法だけでなく人体に対する医学をも学び、帰国すると、1813年、王立中央体操教習所（Royal Gymnastic Central Institute）を創設し、いわゆるスエーデン体操の普及・発展に尽力するのである[13)]。

リングの教えた体操は、周知の様に、その身体的目標によって四つ[注1)]に分けられている。この四つ（教育体操、兵式体操、医療体操、そして美的体操）の中、リングが弟子達に直接教示したものは、教育体操と医療体操（medical gymnastic or remedial gymnastic）であり、他の二つはその考え方を示しただけであったとされているところである。

ちなみに、1894年、リングの弟子ポッセ（B. N. Posse、1862～1895）によって書かれた『Special Kinesiology of Educational Gymnastics』[注2)]によれば、体操は「一般に健康の回復のため、そして身体的能力の保存と発達のための筋肉の組織的な運動という意味に理解されている。」としたうえで、「保健体操的な運動は、時に、治療的目的で用いられ、医療体操的な体操は、保健的で教育的なねらいで用いられ、お互いに補完し合っている。」と記されている[21, P1)]。

4．我が国へのリングの体操の伝播

リングの体操の伝播については、既に、ドイツからの流れのあることを示したところであるが、このシュレーバーに端を発する流れは、アメリカ人、ダイオ　ルイス（Dio Lewis，1823～1886）にも影響していた[19)]。彼は、1862年、『New Gymnastics for men, women and children』を出版し、その中で、万人向きの体操を示し、シュレーバーの体操を引用し、スエーデン体操の理論に従い、虚弱な人達の体操も紹介したのであった[2, 4)]。

ちなみに、彼は、この前年（1861）、ボストンに「The Normal Institute for Physical Education」を設立していたのである[22)]。

このルイスの体操は、1876年、当時の文部大輔田中不二麻呂の体操指導者派遣依頼を受けたリーランド（G, A, Leland，1850～1924）によって、1878年、体操教師養成のた

めに創られた體操傳習所（現・筑波大学体育専門学群）へ伝えられたのである[10)]。

筑波大学に残るリーランドの講述録『體育論』には、「近世に於いて體操を主張し且其教師となりたるものはリング氏ならん。・・・(中略)・・・之を称して治療體操といふ。・・・(中略)・・・此運動治療法は現今、欧羅巴諸州の都府及びニューヨークに於いて実施せり。・・・(中略)・・・今、余輩の用いる軽捷運動はリング氏の創創せる所なり、而して之を改良せし者は百年後に至り亜米利加のダイオルイス氏なり」とあるところである[23)]。

ちなみに、リングの体操を我が国へ伝えたリーランドは、当時26歳、体操の専門家ではなく、ボストン市立病院に勤務する内科医であり、単に体操として、身体運動の方法を主とするだけでなく、解剖学、生理学などをもって補うものであったのである[10)]。

しかし、體操傳習所は、設立当初から軍隊の影響を受け、1880年、授業科目に歩兵操練を加え、陸軍からの教官も派遣されるようになり、その姿を変貌し、1886年、東京高等師範学校（現・筑波大学）に体操科が設立されることに伴い廃止されるに至ったのである[10)]。

三つ目の伝播経路は同じくアメリカからのものであるが、日本人川瀬元九郎（1671～1945）によるものである。

川瀬元九郎は、1893年アメリカに渡り、1895年９月から1899年６月までボストン大学医科大学に学び、医師として1899年秋帰国した敬虔なクリスチャンであった[15)]。

彼は、帰国に際し、前出ポッセの著『Special Kinesiology of Educational Gymnastics』などを持ち帰り、1901年、雑誌『教育実験界』第８巻、第11号に「瑞典式體操法」として、初めて、その内容を示し、翌1902年、『瑞典式教育的體操法』[7)]（同文館）と『瑞典式體操』[8)]（大日本図書）として我が国に紹介したのである。

この時期、雑誌『體育』（第113号、1903年４月）に参助会員として名のある川瀬元九郎は、前年の10月から日本體育会體操学校（1893年設立の日本體育会體操練習所が1900年名称を改めたもので、現在の日本体育大学）で生理衛生を教授していたのである。

そして、1903年５月には、『體育』第114号に「體操論」を書き、「ただに筋骨を運動せしめたりとて體操の目的を達す可きものにあらず」とし、リングのスエーデン体操を紹介し、「今體操を分かちて四種とす、即ち、第１療病的、第２兵式的、第３美的、第４教育的是なり。」としていたのである[9)]。

ちなみに、ポッセは、スエーデン王立体操学校の卒業生であり、1885年渡米し、ボストンで、市民戦争（Civil　War、1861～1865）のとき看護師だった慈善家 Mrs.　Mary Hemenway が創立した学校（Normal school of physical education、1887年には Boston Normal School of Gymnastics となる）を舞台に、スエーデン体操を指導していた[2,19,22)]。

また、この時期、ポッセより一足早く1883年渡米したリングの弟子、ノールウェイ人のニッセン（H. Nissen、1855～1904）は、ワシントンで、医師を対象に医療体操とマッサージを教え『Swedich movement and massage』（スエーデン体操とマッサージ）を著していた[2,19,22)]。そして、彼もまた、川瀬元九郎に影響のあったことを、川瀬は、そ

の著『瑞典式教育的體操法』の例言部分に印している[7)]。

そして、四つ目の流れは、1900年、ドイツ、オーストリアへ留学し、帰国後、初代の東京帝国大学（現・東京大学）整形外科学教室教授の席に着いた田代義徳によるものである。

彼は、ドイツやオーストリアで整形外科学を学び、1904年、體操的整形術（Gymnastische Orthopädie），繃帯具師整形術（Bandagisten Orthopädie），外科學的整形術（Chirurgische Orthopädie）、レントゲン学（Röntgen Lehre）、整形外科的マッサージ（Orthopädische Massage）、そしてリングの医療体操（medical gymnastic or remedial gymnastic）を1864年、器具を用いて出来るようにしたザンダー（G. Zander、1835～1920）の装置を持ち帰ったのである[6, 16, 18)]。

更に、田代は、1917年ニューヨークに至り、その際の見聞録を、雑誌『実験醫報』第40号（1918）に、「鏡前體操」と題し書いている。

この中で、彼は、H. W. Frauenthal 曰くとして、「治療體操ハ、疾病ノ予防及ビ治癒ノタメ又畸形ヲ矯正スルタメニ必要ナモノナリ」として治療体操という言葉を紹介している[24, P261)]。

ちなみに、この鏡前体操を含むアメリカにおける治療体操の素地は、1850年代に書物を介し、前述したドイツやイギリスからアメリカに紹介されたスエーデン式医療体操に端を発するものであろう[2, 4, 19, 22)]。

リングのスエーデン体操が、イギリスへ伝播した経緯について触れれば、それは、リングの弟子インデブトウ（J.G.In De Betou、生没未詳）が1838年に、そしてゲオルギー（C. A. Georgii、1808～1881）などが1849年に渡英したことによるものである[19)]。

ゲオルギーは、1840年、リングの遺稿『Gymnvtiken allmanna grunder』（体操の一般的原理）の出版に関わり、1847年には、同じ内容のものを『Kinesitherapy』として著した人物である。

また、彼は、イギリスにおけるスエーデン体操の主唱者でもあり、内科医ロース（M. D. Roth、生没未詳）の教師でもあったのである[19)]。

ロースは、1851年『The Prevention and Cure of Many Chronic Diseases by Movement』（運動による多くの慢性病の予防と治療）を、そして1852年には、『Movements or Exercises according to Ling's System for the Development and Strengthening of the Human Body in Child and Youth』（青少年の身体を発達強化するためのリング流の諸運動）を著していた。また、彼は、1853年、『The Gymnastic Free Exercise of P. H. Ling』を出版し運動による病気治療に積極的に取り組んでいたものと考えられるのである[19)]。

そして、これらを元として、ニューヨークで Remedial Hygienic Institute を開設していたアメリカ人、テーラー兄弟（G. H. Taylor と C. F. Taylor、共に生没未詳）が、1860年、『An Exposition on the Swedish Movement Cure』（スエーデン式医療体操解説）と『The Theory and Practice of the Movement Cure』（治療運動の理論と実際）を公にす

ることに至ったと考えられるところである[2,22]。

５．我が国における治療体操のその後

前項の様に、我が国へのリングの体操の伝播を見てくると、それは図２に示すように整理することが出来る。

この中の『榭中體操法圖』と體操傳習所への流れは、我が国では、後の体育の系に繋がるものであり、川瀬元九郎の示した療病的体操は、彼が教鞭をとっていた日本體育会體操学校内部に、1907年、「醫療體操部」（初代部長は川瀬元九郎）が出来、スエーデン式医療体操の実践に努め、1914年の大正博覧会では、医療体操並びにそのための器具機械を展示したりして、いわゆる虚弱者のための体操指導と姿勢矯正のための矯正体操を積極的に普及することに繋がったのであった[20]。

しかし、この醫療體操部は、1914年の大正博覧会の頃まで続いたようであるが、日本體育会の経営破綻[20]や寄せてくる軍国主義的傾向の波[17]に押し流されてしまうのである（廃部年不詳）。

四つ目の田代義徳の伝えた治療体操は、東京帝国大学整形外科学教室で「術手」と呼称される職階の者達によって担当され、整形外科後療法の中核として位置づいたのである[18]。

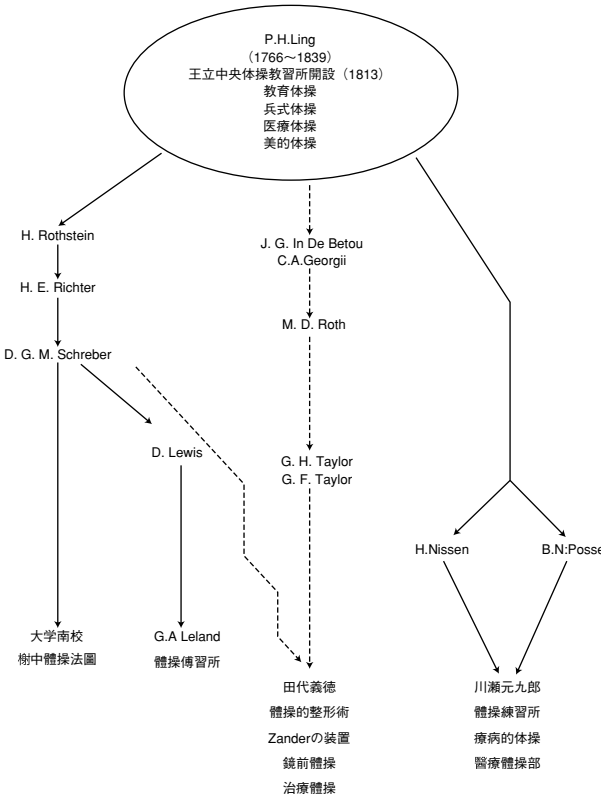

図２　我が国への治療体操伝播経路

この整形外科後療法は、大学医学部における理学療法あるいは物理療法という一医療領域の一部であったが、第２時世界大戦後、我が国へのリハビリテーション思想の導入、展開とともに、新しい意味での理学的療法として、一次、physical therapy の訳としての機能療法と同義と解されることもあったものである[11]。

しかし、1963年、フィジカル・セラピィの統一名称を理学療法とすることにより、それは、現今の理学療法の幹である運動治療法のひとつ治療体操に収斂[12]し、今日に至っているのである。

この様に、川瀬元九郎と田代義徳に端を発する流れは、それ

ぞれ、当初の表現は療病的体操と治療体操と異なるものの、現今、我が国の理学療法でいうところの治療体操そのものの源流と見ることが出来たのである。

6．まとめ

文献を介し、我が国への治療体操の伝播について調べた。

その結果、以下のことを知ることが出来た。

①、我が国へ伝播した治療体操は、その源をスエーデンのリングの体操とするものである。

②、このリングの体操は、ドイツを経て、1872年『榭中體操法圖』として紹介され、これは、後に、我が国最初の文部省指定教科書となった。

二つ、アメリカを経て、1878年、体操教師養成のために創られた體操傳習所へ伝えられた。

三つ、これもアメリカから、川瀬元九郎の手によって、1900年代当初、療病的体操（1903）として紹介された。

そして四つ目は、ドイツで学んだ田代義徳によって、治療体操（1918）として紹介された。

③、『榭中體操法圖』そして體操傳習所へ伝えられたリングの体操は、後に、現今の体育へと収斂し、川瀬元九郎と田代義徳に端を発する流れは、現今、我が国の理学療法でいうところの治療体操そのものの源流と見ることが出来た。

注

注１：1947年、スエーデンで出版された『Gymnastic　Hand-Book』[24]によれば、この四つは、それぞれ educational gymnastic、military gymnastic、medical gymnastic or remedial gymnastic、そして aesthetic gymnastic と記されている。

注２：この書は、主に教育体操（educational　gymnastic）について書かれたものであり、医療体操については、体操が病気に対応して用いられるとき、その運動は、病的配慮がなされているので医療体操と呼ばれると medical gymnastic を定義しているだけである。

参考（引用）文献

１．Hermann E.：Physical Education and Physical Therapy JOHPER、Vol. 8、No. 3、349～351・359、1937

２．今村喜雄：西洋体育史・下、明星社、1949

３．今村喜雄：体育の歴史、大修館、1959

４．今村喜雄：日本体育史、不昧堂、1970

５．石部元雄ほか：近代治療体育の系譜、筑波大学心身障害学系紀要、Vol. 2、127～133、1979

６．金子魁一ほか：整形外科マッサージ療法、南江堂、1964

７．川瀬元九郎：瑞典式教育體操、同文館、1902

８．川瀬元九郎：瑞典式體操、大日本図書、1902
９．川瀬元九郎：體操論、體育、第114号、 6 ～15、1903
10．北澤一利：「健康」の日本史、平凡社新書、2000
11．小池文英ほか：国内における機能療法及び職能療法、整肢療護園、1962
12．厚生省医務局医務課：理学療法士及び作業療法士法の解説、中央法規、1965
13．Licht S.: History, Therapeutic Exercise, 426～471, Waverly Press, 1965
14．中川一彦：身体障害者とスポーツ、日本体育社、1976
15．中川一彦：柏倉松蔵と日本體育会體操学校の教育に関する研究、筑波大学体育科学系紀要、第６巻、21～27、1983
16．中川一彦：柏倉松蔵の医療体操に対する考え方に関する研究、筑波大学体育科学系紀要、第７巻、201～207、1984
17．中川一彦：わが国のいわゆる特殊体育（障害者体育）に関する一考察、筑波大学体育科学系紀要、第18巻、53～61、1995
18．中川一彦：理学療法士の始祖・柏倉松蔵、健康科学大学紀要、第２号、69～76、2006
19．成田十次郎：体育史、講談社、1975
20．日本体育会：日本体育大学八十年史、私家版、1973
21．Posse B. N. : Special Kinesiology of Educational Gymnastics, Lothrop, Lee & Shepard Co. , 1894
22．ライス（今村喜雄ほか訳）：世界体育史、不昧堂、1965
23．李蘭土：體育論、筑波大学中央図書館蔵、私家版、1880頃
24．田代義徳：鏡前體操、実験醫報、第40号、261～265、1918
25．Thulin G : Gymnastik Hand-Book, Sydsvenska Gymnastik-Institute Hund, 1947
26．Wheeler R. H., et al : Physical Education for the Handicapped, Lee & Febiger, 1976

Abstract

The purpose of this study is to elucidate the details of the introduction of remedial gymnastics in the field of physical therapy to Japan.

The following results were found :

1. The origin of the introduction of remedial gymnastic into Japan is Swedish gymnastics, created by P. H. Ling.

2. Swedish gymnastics was introduced into Japan by way of Germany or the United States of America. Especially, Dr. Motokurō Kawase who studied in U. S. A. introduced it into Japan as Ryobyoteki-Taisō (remedial gymnastic in English) in 1903, and Dr. Yoshinori Tashiro who studied in Germany and Austria introduced it into Japan as Chiryo-Taisō (remedial or medical gymnastic in English) in 1918.

3. These two kinds of Japanese remedial gymnastics which were introduced by Dr. M. Kawase and Dr. Y. Tashiro are the origins of recent remedial gymnastics in the field of physical therapy in Japan.

Key Words : remedial gymnastic
physical therapy
Swedish gymnastics
Dr. M. Kawase
Dr. Y. Tashiro